



TAKE ACTION  
YOSANO BRANDING

# うちのまち

vol.03



鏡のような水面を音もなく進むと、自然の一部になったような心地よさがある。  
ごきだそう阿蘇海へ、新たな発見が待っている





## Sea Kayak

### シーカヤック

細身で長いものが多く、直進性が高くスピードが出やすい。船尾に舵(ラダー)があるものは、足下のペダルで方向を操作できる。舟に荷物室があるので、長距離クルーズも可能。熟練すれば泊まりがけツーリングも夢ではない。

## Stand Up Paddle

### スタンドアップパドル

安定感のあるサーフボードの上に立つので、爽快感は抜群。水面を歩いているような独特の感覚がある。パドルでこいで楽しんだり、波乗りしたりするのはもちろん、中にはボードの上でヨガをする人も。さまざまな楽しみ方ができるのが魅力。



## Canadian Canoe

### カナディアンカヌー

比較的大きなものが多く、たくさんの人が乗れるのでファミリーやグループに向いている。のんびり阿蘇海を散歩するのに適しており、釣りをすることもできる。通常、シングルパドルを使用するので、一人でするにはある程度の練習が必要。

# こぎだせ阿蘇海へ

鏡のような阿蘇海にスイーツとこぎだした。

シーカヤックに乗ってパドルをひとかきすると、驚いたカタクチイワシがパシャパシャ跳びはねた。

目線はほとんど海と同じ。光る水面を滑るように進む。こぐのをやめると波紋が消えて、水面に周りの景色が映り込んだ。空と海に包まれて、自然の一部になったようだった。

## 天橋立に守られた 穏やかな海

秋のある朝、私は阿蘇海に浮いていた。阿蘇海沿岸の魅力を見つめ直すトライアルイベント。インストラクターに海上散歩の手ほどきを受ける教室が企画されたのだ。スタンドアップパドル・サーフィン(SUP)にも乗った。大きなサーフボードの上に立ち上がってパドルをこぐ。乗っているというより、海の上に乗っているといった方がいい。力はいらない。真っすぐ立ってひとかきするだけで、スイーツと体が前に行く。

まるで、静かな湖のよう。インストラクターの西木真央さん(38)は、日本海岸の久美浜湾などでもガイドをしているが、阿蘇海は特に注目のスポットだという。「取り囲む山と天橋立が風と波を和らげてくれる。静かな阿蘇海はマリンスポーツの可能性にあふれています」

近くの男山に住む坂野忠雄さん(59)は先月19日、近所の親子を海に

案内した。愛用の組み立て式カヤックとカナディアンカヌーをみんなで抱えて砂浜へ。岸辺の集合住宅に住む隅田靖之さん(39)は、長男の廉君(6)を前に乗せて海に出た。春が来たばかり。したたる水に「冷たい」とつぶやいたが、初めてのカヌーは滑るように進んだ。「気持ちいいなあ」。釣り人はよく見るけど、まさかカヌーに乗るなんて思いもしなかった。隅田さんは「これは楽しいわ」と連発しながら夢中でこいだ。

### 「生き物がいっぱい」

黄前風ちゃん(8)にとっては、ゆるゆるカナディアンカヌーは初めての乗り物。最初は「こわい」と思ったが、それをつかの間、パドルをこぐ母・めぐみさん(39)に「わたしにもそれかして!」とせがんだ。弟の岳ちゃん(5)は「お魚も見つけたよ」と目をキラキラさせている。岸辺を見ると、祖父母がやってきた。「おーい、おじいちゃんおばあちゃん。手を振る祖母(67)は同町弓木に住んでいる。「阿蘇海で遊ぶから見に来てと言われてね。何事かと思ったけど、とても楽しそうね」と言って目を細めた。

手のひらに小さな巻き貝をのせて、風ちゃんが言った。「生き物がいっぱい」。天橋立の内湾である阿蘇海は、

水が循環しにくい環境ではある。でも、生き物たちが暮らす大切な海であることに変わりはないのだ。

### 海はもっと身近だった

岩滝の人たちにとって、阿蘇海は恵みの源だった。野田川から大江山の栄養がたっぷり注がれる汽水域。海岸ではアサリがたくさん捕れた。脂がのった「金樽イワシ」は特に有名だ。古老によると、昭和初期には、大量のイワシの重みで網の浮きが沈み「網がない」と探すほどだったという。ワタリガニは捕れすぎて売れ残り、食卓には嫌になるほどカニがあった。ぐずっていると親から「泣いてばかりいたらカニ食わずぞ」としかられたらしい。

昭和30年代、幼かった坂野さんは、クロクチという二枚貝を探っている人が浜にたくさんいたのを見ていた。「胸までつかって足の裏で見つけるんだ。泥の中に隠れているのを探したもんだよ」。20代になってからはヨットで海に出た。見た目は幼少の時と変わらなかったが、海の底は変化していた。戦後の経済成長を経て、野田川流域に人口が増えた。生活排水が川に流れ、田畑で化学肥料を使う量も増えた。生き物たちが水をきれいにするよりも汚れる方が早くなり、海の底にヘドロがたまるようになった。クロクチを

掘る人の姿は、いつしか消えた。

海を埋め立てて阿蘇シーサイドパークを造る工事が始まったのは1988年。芝生の公園とトイレも完成したが、海辺には鎖が張られ、立ち入りを制限する看板がかけられた。海はこうして遠い存在になっていった。

坂野さんは昨年の夏、同じ男山にある地域の交流拠点「スタジオキ」(植田友香理代表)が近所の浜のゴミ拾いをしながらカヤックで遊ぶ「阿蘇海enjoy!」という会を始めたと思った。自宅には譲り受けたカナディアンカヌーが眠っていた。「うちのカヌーも使いたいか?」。坂野さんは植田さんに連絡してカヌーを持ち込んだ。一緒に遊ぶと、子どもたちはいつも「もっと乗りたい」と笑顔を見せる。お父さんやお母さんも楽しそうだ。坂野さんは「阿蘇海が好きなのが、こうして増えたらいいなあ」と思うようになった。

夏の朝焼け、秋のスーパームーンに花火観賞…。季節を感じる瞬間を阿蘇海の上で楽しむ会は口コミで広がり、出会ったこともない30代の女性2人が友達と申し込んでくれたこともあった。カヌーは何度か使っていると部品が外れてしまったので、坂野さんは木を削って手作りした。新しいカヌーではないから、これからは修理が必要になるだろう。できるだけ長く大切に

使おうと、植田さんは大人から1000円の参加費をもらって修理代をためることにした。子どもは無料。ライフジャケットも500円でレンタルする。

5月にも、みんなで遊ぶ会を企画する予定だ。申し込みや問い合わせはスタジオキ(0772-46-4687、メールはsutajio-ki@uedakentiku.co.jp)まで。

### 世界的にも珍しい地形

町は2015年、阿蘇海を再び人が親しめる場所にしたいアイデアを募った。選ばれたのは東京の隈研吾建築都市設計事務所。2020年東京五輪の主会場になる国立競技場を設計する有名事務所が、なぜこんな小さな町に興味を持ったのか。南太平洋のパラオや西インド諸島のバハマなど、世界のリゾート地の設計も担う隈研吾さんは昨年3月に与謝野に来て、こう言った。「陸地と同じ目線で海が広がる。沖には穏やかな海を守る天橋立があり、後ろには起伏のある山が連なる。こんなにユニークな海辺の街は、世界中を探してもそう多くはない」。そして一言付け加えた。「この美しさに、住民の皆さんはまだ気づいておられないのではないですか」

男山区では2012年の夏から悪臭を

放つアオサの回収に取り組んでいる。環境問題への関心は高い。でも、隈さんのように阿蘇海を「美しい」と思っている人は、地元何人いるだろう。坂野さんや植田さんは、阿蘇海に浮いて気がついた。うちのまちが美しいということ。だから、もっときれいにしたい。そんな人が増えれば海はもっと身近になる。まずは一緒に遊ぼう。静まりかえった阿蘇海は、住む人の思いを鏡のように映し出している。



### あなたの絶景



### 蒼空 ② 和田夢花さん(江陽中2年)

空色と夕焼けのグラデーションがとてきれいですね。この景色を見ていたら、お花見に行きたくなってしまいました。与謝野の桜の写真もお待ちしております。(編集部)



あなたの絶景募集! あなたの知っている与謝野町の「絶景」を教えてくださいませんか? 特に素敵なのは「うちのまち」や与謝野町公式SNSページに掲載させていただきます。次回のプレゼントは第1号に掲載した谷口酒造の「麹だけの甘酒」です。応募はInstagram、Facebook、twitterのいずれかで、与謝野町公式IDをフォロー。それから写真にハッシュタグ「#与謝野うちのまち」と「一言コメント」をつけて投稿すれば完了です。与謝野町公式IDへのリンクや、詳しい応募方法は右のQRコードからどうぞ。お問い合わせは、与謝野町商工振興課(0772-43-9012)へ。

